

吉備国際大学研究紀要
(人文・社会科学系)
第30号, 33-43, 2020

英語所有構文の総括とdouble genitiveのもう一つの分析の可能性

平見 勇雄

The Summary of a study on the Possessive Genitives and of-Genitives and another analysis of Double Genitive

Isao HIRAMI

Abstract

I have studied the differences between the Possessive Genitives and of-Genitives over the past twenty years. It was hard to elucidate the usages of each genitive, especially the commonality between a possessive relation and a temporal relation. I managed to solve the problems on them and published the book recently.

The first half of this paper is about the summary of the book and the second half is another way of thinking on double genitive that was not included in the book.

Key words : Possessive Genitives, a temporal relation, Double Genitive

キーワード : 所有構文, 日時の表現, ダブル・ジェニティブ

はじめに

昨年暮れに、二十数年にわたる研究のまとめとして英語の所有構文を一冊の書にまとめることができた。2016年の再考察を経て長年解決できなかった日時の表現と所有関係との接点を2018年に見つけることができたからである。

今回は細かな議論を省き、この研究のエッセンスを前半で紹介し、その後所有構文から見えてきた言語の事実と、日本語、英語の言語傾向から生物との比較に至った経緯を俯瞰し、著書には入れなかった考え方を後半に追加して、英語所有構文の分析を終えたい。

1 所有構文の問題点

大学院時代の研究テーマであった英語所有構文にはさまざまな解決すべき問題があり、修士論文ではその一部を解決することができたが、その後も解決すべき問題が多くあったため、その問題に長年取り組んだ。英語の所有構文とはA's B, B of Aという二つの形式で、A's Bとはmy book (私の本), Tom's car (トムの車) のような例を言う。一方のB of Aは the leg of the tableやa cup of tea, a friend of mineのような例で「名詞of名詞」の形式で表されるすべてを指す。この二つの形式A's BとB of Aはペアのように取り扱わ

れるが、その理由は両方の形式で表現できるものが数多くあることからだ。例えばLincoln's assassination VS the assassination of Lincolnやthe train's arrival VS the arrival of the trainのような表現だ。

しかし一方の形式でしか使えない例も数多くある。my dog VS *the dog of meや*the table's leg VS the leg of the tableのような例をはじめ、たくさんの例が一方でしか表現できない。（*の印は、普通の用法では使われない、認められない例を指す。）

なぜある表現は一方の形式でしか表せないのか？そしてなぜいくつかの表現は両方の表現で使われるのか。この説明を細かな部分も含め1990年代半ばから2000年代半ばまで毎年継続して試みてきた。

よく参考書にA's BのAには生物（人）が来てB of AのAには無生物が来るというが、A's Bに無生物が来る例もある。すぐに思い浮かぶのは所有格の関係代名詞とか指示代名詞だ。たとえばI live in the house whose roof is red.（私は屋根が赤い家に住んでいる）だ。一方のB of AのAには無生物ではなく、生物も来る（both of usや上のthe assassination of Johnの例）。A's BのAが人を中心とした特徴を持っていることから、実際は結構多くの説明はできる。（以下に示す。）しかし、長年解決できなかったのが日時の表現（today's newspaperのような表現）で、人かそれに準じる生物のような特徴を持ったものであるという説明では無理があった。日時の表現は人（生物）とは関係ない表現だからだ。これを解決することができたので著書をまとめたのであるが、そのごく基本的な内容を前半に簡単にまとめておきたい。

2 前提となった考え方

言語分析にはいくつかの方法があるが、私が取ってきたアプローチは認知言語学という立場だ。認知言語学とは「文の形式と意味は切り離せない表裏一体の関係にあり、形式には人の認識(意味)が反映されている」

という考えだ。「文の形式に人間の認識が反映されている」代表的な例が語順だ。多くの言語で、主語と目的語の語順には一つの傾向が見られる。わかりやすい典型的な例は「ジョンはボールを蹴った」という文だ。John kicked the ball.という英語は、ジョンが主語で語順として先に来て、ボールが後に来る。この理由は、動いているものと動いていないものが目に入れば、人は動いているものにまず目がいく。そのあと次に動くものに視線が移動する。我々人間は動くものと動かないものがあったら、本能的に動くものに目が向く性質を持っている。生物として生きていくため食糧を確保するとか、敵からの攻撃に対処するには必要な本能だからだろう。その点から文を見ると、ジョンが蹴るという行為を最初に行うわけだからジョンが動く。だからジョンにまず着目する。そのあと飛んでいったボールに目が移る。見ている人の視点があるものから別のものに移っていく。つまり言語の成り立ち（この場合は語順）と人間が外界を認識する（意味を読み取るということ）あり方には類似の関係があるのだ。

全てではないが、英語の多くの他の文にも同様の傾向が見られることから「同じ形で表されている文や形式の間には意味的に相互に共通性が見られる」という特性がわかる。（逆に言うと「形式が異なれば意味が違う」ということになる。）

同じ形で表されている形式には意味的に相互に共通性が見られる例をもう一つ挙げておくと、話法の用例がそうだ。直接話法と間接話法を我々は高校で習うが、以下のような書き換えをよくやった。

He said to her, "Do you have a pen?"

He asked her if she had a pen.

意味はどちらも「彼は彼女にペンを持っているかどうか尋ねた」だ。上の文が直接話法（実際に彼女に尋ねた文章そのまま）で、下が自分の言葉に置き換えて尋ねた（だから間接話法と呼ばれる）文だ。しかし直接話法の文が疑問文の場合、間接話法に書き直すと下の文のようにifが出てくるが、なぜ疑問文だとifにな

るのか？

疑問文というのは、尋ねる内容が事実かどうかかわからないから問う。実は仮定法も同じ意味合いを醸し出すことがある。「もし～であったら」と訳すのも仮定する内容が事実かどうかわからない場合がある。たとえば「もし彼がそこに行っていたら大変なことになっている」という文は、行ったかどうかの事実がわからない場合に使われる。だから疑問文と仮定法の表現で、ときに意味が共通する。つまり部分的でも意味に共通点があれば、相互に同じ形式が使われる可能性があるのである。それは英語の場合、形式を重んじる言語だが、言語形式が限られているからだ。しかも仮定法の授業では、if節のifが省略される場合、次のような書き換えを習った。

If it were not for you, = Were it not for you,
(もし君がいなければ)

If I should fail, = Should I fail,
(万一失敗したら)

授業ではifを省略するときは、主語と助動詞を逆転させると習うだけだった。決して「疑問文の形にする」という説明ではなかった。しかしこれらはまさに疑問文の形だ。両者には意味的に共通するところがあるからこそ同じ形式が使われているのである。まさに認知言語学で前提としている「意味と形式は表裏一体の関係にある」という仮説を下支えする例だ。

現実かどうかかわからないという意味で言えば、その形は疑問と仮定法の関係に限らない。祈願文もそうだ。May you live long. (長生きしてくれたらなあ。) 祈願もそうであって欲しい、あるいは現実にそうなって欲しいということであって実際にそうなるかどうかはわからない。だから疑問文の形になっている。

このような前提で分析を行うのが認知言語学で、この立場からA's BとB of Aの対比、分析を行っていくことにする。

3 A's Bに関しての共通性

形式が同じであれば、A's Bの形式の用例の間に何かしら共通性があることになる。それを探ったのがJohn Taylorだ。以下、簡単にその内容を紹介する。TaylorはA's Bを次のような5つに大きく分けている。1 動詞派生名詞の関係 2 親族関係 3 部分全体関係 4 日時の表現 5 所有関係

1は、侵略するという意味のinvadeという動詞を例にとると、主語にあたる侵入する何かと、目的語にあたる侵入される何かが通常思い浮かぶ。その二つから特定されるthe army's invasion, the city's invasionのような例が中心だ。

2の親族関係は、John's father (ジョンのお父さん) やTom's sister (トムのお姉さん) のような表現だが、親族関係と言いながらその意味を広く取りJohn's friend (ジョンの友人) を始め、人と人の関係だけでなく、人と関わりのある会社や、社会のさまざまな機関等の表現も含む。(the society's president (協会の会長), the University's Vice-Chancellor (大学の副学長), the club's treasurer (クラブの会計士) など。)

3の部分全体関係は、部分の名(B)を言えば、必ず全体が思い出される関係である。たとえば指という語を聞けば、手や足が必然的に思い出される例だ(John's hands(ジョンの手), the cat's fur(猫の毛皮), the ship's funnel (船の煙突))。

4の日時の関係は、日時の点からBを見ている表現だ。(yesterday's events, this morning's car crash, tomorrow's weather, today's newspaper)。

しかし、なぜこれがA's Bで表すことができるのが問題だった。この形式の典型的な関係である所有関係とつながりを持つ他の用例とは一線を画しているからだ。

そして5の所有関係(John's book, John's house, John's train)。John's bookは「ジョンが書いた本」「ジョンについて書かれた本」「ジョンが持っている本」等で、

いくつかの解釈が可能である。John's houseなら「ジョンが所有している家」の他に「ジョンが住んでいる家」「ジョンが建てた家」等だ。John's trainにも「ジョンが所有している列車」の解釈は可能であるが、実際は列車を所有することは普通ないので、「ジョンが乗っている列車」あるいは「ジョンが乗った列車」等が一般的な解釈である。

以上からわかるように、所有関係の最大の特徴は1から4が固定化した訳しかないのに対し、所有関係だけはいくつかの解釈が可能なことである。その解釈は我々が普段経験する上であり得る関係だ。そしてその訳がはっきりと決まるのは「文脈に置かれて」である。単に表現を見ただけでは可能性はたくさんあって絞れない。

この所有関係はA's Bで表される関係の中で典型的なものとしてされている。Taylorによれば、どのような組み合わせの場合にも所有の意味が可能なこと、言語習得の点からも、所有の意味から子供が習得していくこと、そしてネイティブにも所有関係がA's Bの典型的なものであるという直感がある等の理由が挙げられている。

ではこのすべての所有関係の用例に共通するものは何か。TaylorはAにはBを特定する特徴があると述べている。Langackerという別の認知言語学者はこのA's BのAをreference pointと言って、Bを特定する際の目印になるもの(landmarkという語を使っているが今では日本語にもなっている。ランドマークタワーという高層ビルを知っている人もいるだろう)だと述べていて、AとBの間には顕在性(どれくらい目立つかということ)に差があるという特徴を指摘している。A's Bの例に見られる共通性だ。たとえば国分寺という地名はいたるところにあるので、国分寺だけでは、どこの国分寺かわからない。そこで高松の国分寺と言えば、複数ある国分寺の中から特定されるわけである。この場合、高松がAとなる。つまりAには一般的によく知られた、よく目立つものが来る。だからAに

は基本的に人間(生物)が来る。人間は人間にとって一番関心のある対象だからだ。また我々が身を守るのは、攻撃して来る動く存在が大半だ。食糧の確保も、狩りなら動物が対象になるから、動く物に関心が向く。いずれも生物学的に自然である。そのような特徴がAに宿っていることから、Aは人間を中心とした生物となっていると考えられる。

しかし問題は4の日時の表現だ。日時というのは抽象的なものである。だからcar crashやnewspaperのように、具体的なものがBで、Aに抽象的な日時が来るのは本来のA's Bからするとおかしいことになる。

また所有関係が典型だとすると、非典型例である他の関係の延長上として、動詞派生名詞、親族関係、部分全体関係、日時の関係があることになる。だから人、生物という特徴から、他の関係のAにも関連を見出だそうとする。実際、他の関係は共通性を見出すことができる。

しかし日時だけは基本的に人とは繋がらない。これをどう考えるかがA's Bの最大の問題でTaylorもLangackerも解決していない問題だった。

これを解決するヒントを見つけ、再度考察したのが平見(2016)だった。このことは後で紹介する。

4 B of Aに関して

次にB of Aがどのような特徴を担っているのか。A's BではなくB of Aでしか表現しない例を挙げてみる。どちらの形式でも表現できるものでは特性が見えてこないからである。

the beginning of the century (世紀の始まり), the back of the bus (バスの後部), the foot of the mountain (山の麓), the middle of the night (夜の最中), the top of the page (ページの上部), さらに all of ~, each of ~, any of ~, none of ~, many of ~, most of ~, some of ~, more of ~, much of ~, those of ~, the rest of ~, portion of ~,

half of ～, one-third of ～, 40% of ～, part of ～, the proportion of ～など。

こういった定型となっている表現形式や、AがBに内在する特徴となっているもの (a man of ability, a man of letters, a man of tact, それぞれ順に「有能な人」「文人」「機転のきく人」という意味), 容器と中身の関係にある例 (a cup of coffee, a glass of milk, a spoonful of sugar), AがBを構成している構成物の例 (a house of brick, a floor of wood), Bの中身 (内容) をAが表している例 (a picture of me, a tale of a hare and a tortoise, 順に「私が描かれた絵」「ウサギと亀の物語」という意味) はすべて, さまざまなタイプの部分全体関係を表していることがわかる。

さらに同格に位置づけられる表現 (an angel of a lady, a mountain of a wave, a castle of a house, a devil of a job, それぞれ順に「天使のような少女」「山のような (形の) 波」「城のような家」「(悪魔のような) 辛い仕事」という意味) は, すべて比喻であるがAとBがイコールの関係として捉えられる。またthe name of John, the city of Rome (順に「ジョンという名前」「ローマという都市」という意味) も, まさに名前=ジョン, 都市=ローマという, 両者がイコールの関係で結べるものである。しかしこれらも一方がもう一方の上位, 下位の関係で, 名前の中には具体的にはジョン, トム, ポールのようにたくさんの具体的名前があり, 都市にもローマ, 東京, ロンドンのようにさまざまあってAとBは包摂関係にある。これも包摂関係なら部分全体関係の一つだ。それに同格関係というのは全体に対し, 部分の占める割合が高くなっていき99%となり最後100%となったときに, 部分と全体の関係にあったものが全体と全体の関係となって重なる。これがまさに同格の関係であることから部分全体関係はもともと同格と強い関連性がある。

以上の表現はA's Bでは表すことができず, B of Aだけで表現される例だ。従ってB of Aの数々の用例の共通性は部分と全体の関係であり, B of Aは部分全体

関係を担う形式であることがわかる。

5 A's BとB of Aの両方で表現される例

A's BとB of Aの両形式で表される表現を次に検討してみる。その代表的な例が, 行為と行為者, あるいは被行為者の関係だ。たとえばKennedy's assassinationという表現は「ケネディの暗殺」という意味だが, ケネディ大統領という人物に起こった事であるから, 一種の部分全体関係と捉えることが可能だ。この出来事はその人の「中で」発生しているからだ。この例は行為の内容が被行為者の中で起こったものだが, 一方で行為の内容は行為者から発せられるものだから行為者が生み出したものである。物理的な点での類似で言うと, 赤ちゃんが親から生まれる前は親の一部として存在し, 部分全体の一種だから, 行為も行為者が生み出す点で抽象的ではあるが, 部分全体関係の一種と見なすことができる。

このKennedy's assassinationの例は, Taylorが動詞派生名詞の一つとして分類し, Langackerは, AとBが具体, 抽象の関係にあると分類していたが, 捉え方によってはいずれも部分全体関係と解釈することができる。つまりA's Bで表されている表現がB of Aの形式で表せるかどうかはAとBの間で部分全体関係が成り立つかどうかで判断されるのである。

6 形式と意味の相補的關係

5の主張を証明してくれるのが次のような例である。

*Mary of Mrs. Brown

Paul McCartney of the Beatles

ブラウン夫人とメアリーの関係は通常, 部分全体関係が成り立たない。一方, 同じ固有名詞同士でもビートルズのポールマッカートニーというのはビートルズというグループの一員であるから全体の中の一人で部

分全体関係にある。だからこの表現が可能だ。

逆に、一見関係を見出だせないような二つの名詞がこの形式で使われたときでも、表されている以上、両者の名詞間で内的な解釈をするようになる。a mountain of a waveという表現を考えてみても、普通は山と波は別物で結びつけて考えたりはしないし、普通、部分全体関係にはない。しかしこの形式で表されるからこそこのような解釈ができ、可能となる。つまり形式と意味の関係は相補的なのである。

7 A's Bの人と日時の表現の共通性

3の最後に、これまで英語の所有構文で人と日時の関係を説明できなかつたと書いたが、これが所有構文の最大の問題だった。しかし両者には共通する特徴があった。

英語にはSilverstein Hierarchyと呼ばれる、人同士の親近感の順位が段階的にあることが知られている。人の顕在性が最も高い（目立つ）のは一人称（つまり自分）で、二人称（目の前にいる人）、そして三人称の順になる。一人称、二人称はそれぞれ「わたし」「あなた」だ。この二つはI, youという語であるが、その中身（人物）が特定されるのは、実は語が使われている会話の現場で初めて明らかとなる。これまでA's BのAには人が来ると一括りに言ってきたが、その典型は現場で特定される性質のものだ。

この「現場」は必ずしも目の前だけに限らない。文脈の中でAの内容が決まるのもそうだ。その場合、人である必要はない。事実、次のような文を我々は中学、高校で習ったはずである。

I live in the house whose roof is red. (Its roof is red.)

（私は屋根が赤い家に住んでいる）

関係代名詞となると、本来は使えないはずのA's Bの形式が使える。指示代名詞のitsも同じだ。これらのwhose, itsも文脈に置かれて初めてその内容が明らか

になる特徴を備えている。つまりtoday's newspaperやyesterday's eventsのような表現も、発話時に初めてその日がいつであるかが特定される。したがってA's BのAが持っている最も重要な特徴は（言語学の用語である）deictic（直示的）な表現であることがわかる。だからこそ無生物の名詞で使えないはずの指示代名詞や関係代名詞にA's Bの用法があるのだ。つまり日時の表現はA's Bの例外などでは決してなく、一人称、二人称同様、現場や文脈で内容が決まるという特徴を持っていて、A's BのAの本質を成しているのだ。そして現場で内容が明らかになるという、コンテキスト依存の特徴がmy bookのような所有関係の例で、AとBの解釈が文脈や現場で決まる性格と一致するから、所有関係がA's Bの典型例と感じられるのだと考えられる。

以上のようなことからA's BとB of Aの形式の特徴が明らかとなり、形式と意味との間にやはりきちんとした関係があることが証明されたのである。

8 『「する」と「なる」の言語学』から見えてくる言語と生物との関係

日時の表現の結論が長年出ないままに、時間が過ぎた時期があった。しかし認知言語学的な立場から研究がなされていた英語の文や語句の形式と意味の間に有意義な対応関係がいくつも見られていたことから、所有構文にも同じような特徴があるとの確信があった。結果的に視点を変えたことで、日時の表現と所有関係の例に共通点を見つけることができた。その分析から、言語には例外が常に存在するものの、かなり決まった法則にしたがって成立していることも分かった。

この分析を通して再認識できたことは、池上（1981）が指摘した、言語というのは、ある一方向に傾いて発達する性格を持っているという特徴である。平見（2016）にも紹介したが『「する」と「なる」の言語学』でこの事実が論じられている。これは英語が「する」的、

日本語が「なる」的な言語になっていったという内容だ。その事実が、言語を司っているメカニズムには、生物に備わっている変化の仕方と酷似した特徴があり、人間にとって言語は生存のための生物としての戦略の一方法なのではないかと考えるようになり、それが生物との共通性を探ろうと思うきっかけとなった。

池上の主張をごく簡単にまとめておくと、「する」的とは誰かが何かを「する」という表現を好む言語ということである。わかりやすく言えば、英語は主語を必ず明示する言語だ。中学、高校で5文型と言うのを習うが、命令文でもない限り、英語にはSが必要だ。その特徴が表現形式を重んじる方向に進み、英語全体に同じような関連した特徴をもたらしたことがわっている。人の意識とは関係なく、一方向に全体が変わっていく特徴は、生物の変化にもともと見られることから（いつも引き合いに出すのは、陸上にいた鯨の先祖が海に進出していった例や、鳥のように地上から空に生活の場を移す場合、単に羽が生えるという一つだけの特徴が変化すればいいというのではなく、同じ方向に関連ある体の多くが変わっていくことが要求されるということ）言語にも背後に生物を支える仕組みが関わっているのではないかとこの観点から、両者の共通性を探ってきた。言語も生物も多様であることや、作られている仕組みが似ていること、言語にも生物にも成立を支えるバックアップ的な性質があること、そして言語習得においては、昔から議論になっていることだが、言い淀み、間違った文、途中までしか発せられなかった文を始め、不完全な文を親や周囲から聞くにもかかわらず、赤ちゃんはそれらから有用なもののみを取捨選択して、必要な文法を習得することも、植物の根がさまざまな養分を取捨選択して全体としてバランスよく必要な要素を取り込むことと極めて似たプロセスであることなどから、背後に同じメカニズムがあることを指摘してきた。

言語がどのような仕組みで成り立っているか、どのような言語習得がなされるのかは解明されておらず、

普遍文法（数千の言語に共通した一つの文法）が存在するという立場と、人間の経験が言語を形作っていて、言語は個別的であるという立場には大きな隔たりが依然あり、長年の研究でも決着はついていない。

ただ、生物がそれぞれのあり方で生存の方法を確保しているように、言語も人間が思考を武器に生存をより確実なものにするために生まれてきたものであるとするなら、そこには当然、そのメカニズムが何らかの形で絡んでいるはずだ。どんな生物も生き残りの戦略を独自に持っているが、たとえそれが独特なものであろうと、生物に内在しているメカニズムが働き、生まれたものであろうから。そうであれば、人間の思考を具現化する言語が、他の生物が持つに至った生き残る術を生み出すのと同じからくりがその存在を作り出したと考えてよい。したがって今後も言語と生物の共通性を探っていきたい。

最後に、昨年暮れに出した著書『英語の所有構文に関する考察』で取り上げたdouble genitiveに関するもう一つの分析を考察したい。double genitiveには複雑な問題があり、著書とは別の、もう一つの考え方があるからである。

9 double genitiveに関して

a friend of mineのような表現をdouble genitiveと言う。Taylor (1996 : 327) によるとdouble genitiveはシェークスピアの時代から既にある表現でofと'sの両方が一つの形式の中にあることから以前より論争があった。何がこの形式の問題となっているのか。代表的な例を挙げて紹介する。

Taylorが問題と考えている例はthat husband of Mary'sという表現だ。Jackendoff (1977 : 116-19) や Quirk et al. (1972 : 890) にあるように、人と人の関係を表しているa friend of mineは「私の友人の一人」という意味で、書き換えるとone of my friends (私の友人の一人) である。そのためthat husband of

Mary'sをa friend of mine同様に考えるとB of A'sのBとA'sが部分全体関係にありMaryは複数の夫を持っていることになる。日本語すると「メアリーの(複数の)夫の中の、あの夫」となるからだ。友人なら複数いるのが当たり前で問題ないが、夫は一人だ。そこでTaylorはB of A'sのBとA'sは同格関係にあると主張している。

that husband of Mary'sを同格関係と考えることは最も無難な取り方だ。実際に平見(2019b)ではその立場を取った。ただしTaylorがなぜ同格関係と捉えているのかについて具体的説明はしていない。だから私が同格関係と考えるのとは理由が違う可能性もある。(TaylorはA's Bの分析を中心にしているB of Aのことについては多くを述べていない。) いずれにしてもこの考え方は支持できる。

しかしもう一つの考え方もあるように思う。この点を以下述べたい。

今述べたthat husband of Mary'sを同格関係とし、私が支持した理由は、同格の意味をB of Aの形式が担うからだった。a friend of mineはone of my friendsの意味なのでAとBの関係が部分全体関係になる。一方、that husband of Mary'sはAがMary's husbandと、単数であると考えれば同格関係が成り立つ。that husbandとMary's husbandは同じ人を指しているからだ。だからいずれも形式に合う条件を満たしていることから、そう考えるとうまくおさまる。

同格関係は、Bが不定ならAも不定、Bが定ならAも定冠詞という形になるのが一般的だ。たとえばan angel of a lady(天使のような女性)、a mountain of a wave(山のような波)のような不定冠詞同士の同格とthe name of John(ジョンという名前)、the month of May(5月)はいずれもAが固有名詞なので同格としてBに置かれる名詞は定冠詞だ。このことからthat husbandとMary's husbandも定冠詞相当のthatとMaryによってhusbandを修飾し、同じ人を指しているのだから同格と取れる。

しかし同格関係にはもう一つの例がある。that fool of a man(あの馬鹿な男)のような例だ。この表現はAとBが同じ人を指しているながら定冠詞、不定冠詞と分かれてしまう。

なぜこのようなことが起こっているのか。また、これを同格と考えてよいのか、そしてもう一つ、考えなければならない問題があるため、さらに別の考えを提示したい。

そのきっかけになったのは次のような表現からだ。

This bag is mine.

*This sister is mine. *This friend is mine.

I repaired the car's headlights.

*The headlights that I repaired were the car's.

We learned about Bill's murder.

*The murder that we learned about was Bill's.

Taylor (1996: 321)

一番上の表現はいわゆる所有関係で「このカバンは私のものです」という意味だが、すぐ下のように「この妹は私の妹です」とか「この友人は私の友人です」のように所有関係ではない、親族関係だと言えなくなる。日本語でもおかしい感じがするが(「これは私の友人です」という日本語にするとThis is my friend.となって所有代名詞が出てこない)所有代名詞は文にすると所有物の場合以外は認められないのである。それは物(car)の場合や動詞派生名詞の場合も同様である。(マイケル・ジャクソンとポール・マッカートニーの曲に「The Girl Is Mine」というタイトルの曲があるが、この場合のgirlは歌詞からして女の子を「物として扱っている」から可能なのだろう。)

a friend of mineの例とthat husband of Mary'sを同じに考えるなら、Mary'sは間違いなく所有代名詞だ。しかしhusbandという親族関係に対して所有代名詞を使うことは実は許されない。そうだとすれば、Taylorが主張し、私も支持した同格という結論が本当によいのかという問題が出てくる。

A's BとB of Aの形式は相互に補完的だと述べて

きた。それはA's BのAが長い名詞になる時はB of Aの形式を使って表すことがあったし (my sister's husband VS the husband of the woman who sent the man the strange letter), 一方でthe roof of the house (家の屋根) という表現のAが関係代名詞や指示代名詞になった場合whose roofとかits roofというように、A's Bの形式で表す場合もあることから。いずれも本来ならその形式では表せない例だ。

しかし後者のwhose roofやits roofは、A's BのAが持つ「現場で中身が決まる」という本来の機能を果たしていることから、これが例外的な表現ではないことは見た。そうだとすると前者の、Aが長い名詞になる場合に使われる例をどのように見るかも含めて新しい捉え方が可能になるように思う。

that husband of Mary's という表現の意図は、husbandを二つのAから特定したいということが表現者の狙いだ。husbandをMaryだけではなく、別の意味合いも加えて特定したいということだからである。それを可能にする方法はあるのか。

Bを特定する場合、この形式では一つの語だけしか特定することができない。たとえばMary's sister's boyfriendはA's B's Cという表現形式となるが、AはBを特定するだけでCを特定しない。そしてCはBからのみ特定される。それならBを二つの名詞から特定したい場合どうするのか？

A's BはAがBを特定する性質が形式自体に内在している。もう一つの形式のB of Aにはない特徴だ。しかしB of Aにはa B of Aとthe B of Aの両方がある。もしBを二つの名詞から特定したい場合、A's BにB of Aの形式を加え、Bを特定できる資格のあるAを持って来ればA's B of A (この場合、先頭のAと後ろのAは違う名詞) という形でBを特定することができる。これは言わば、動詞派生名詞を名詞化した場合、Bの名詞が二つから特定されるのと同様だ。つまりJohn's

assassination of Tomという表現は、the assassination of Tomという表現にJohnが加わってassassinationが二つの項から特定されているのである。この表現に似たものとするなら、that husband of Mary'sはこの類推から二つの語からの特定が生まれたと考えられるのではないかと思う。

Mary's husbandのMaryは所有格だ。a friend of mineのmineは、myがofの後ろにそのままでは文法的に置くことができず、mineに「変化させて」置かれたと考えられるがthat husband of Mary'sは意味からすると、そのようにすることに問題があるからこそ、似てはいるものの別の表現と考えた。そうであれば、文法的には許されないことだが、二つの語からの特定 (つまり表現が豊かになるという実質を取って) が優先されてきた表現ではないかと思えることができる。

もともとdouble genitiveは、文法的には議論のある表現だった。そしてB of Aという形式は、Aにさまざまな名詞を持ってこることができた。その一つがBを特徴づける性質だった。that fool of a manという表現が同格関係の一つと位置付けてよいのかどうかは現時点では判断を保留にするが、that foolだけでは男性か女性かわからない。そのため意味を補おうとして後ろに付け足して生まれた表現のように取るのが可能だ。B of AのAはBの意味を特徴づける性質があるのだから。そうであればMary'sが所有格か所有代名詞であるかはともかく、that husbandのアイデンティティをより明確にするという趣旨から、この表現が生まれたと考えることは決して間違っているとは言えない。むしろそのような考え方も可能だと思う。B of AのBの意味をより具体的にし、補うことが言語表現の向上になるのなら、それはまさに生物が、そして言語がより進化してきた事実と重なり合うからである。

参考文献

- 馬場悠男 (2009) 『この人この世界「顔」って何だろう?』日本放送出版協会.
- Deane, Paul (1987) "English Possessives, Topicality, and the Silverstein Hierarchy", BLS 13, 65-76.
- Hayase, Naoko (1993) "Prototypical Meaning VS Semantic Constraints in the Analysis of English Possessive Genitives", English Linguistics 10, 133-159.
- 平見勇雄 (1997) John's picture, a picture of Johnにおける解釈の違いはなぜ生まれるのか — 認知言語学的観点からの説明 吉備国際大学社会学部研究紀要 7, 279-284.
- (1998) 「Of-genitiveのスキーマに関する一考察」英語表現研究 第15号 pp.79-87.
- (1999) 英語の所有構文の形式の相違点 吉備国際大学社会学部紀要 9, 61-66.
- (2000) 英語の所有構文にあらわれる名詞 (head noun) の概念の依存性に関して 吉備国際大学社会学部紀要10, 47-53.
- (2001) 英語の所有構文の形式の相違点 (2) — 言語形式の選択に関係するいくつかの要素について 吉備国際大学社会福祉学部紀要 6, 105-112.
- (2003) 英語の所有構文をめぐる疑問 (2) — A's B, B of Aとそれに対応する日本語の「AのB」の比較 吉備国際大学社会福祉学部紀要 8, 55-66.
- (2004) 英語所有構文の性質に関する再考 — A's B, B of Aの両形式で表される表現との比較から 吉備国際大学社会福祉学部紀要 9, 9-17.
- (2005) 英語所有構文に現れるプロトタイプから外れる用例に関する考察 吉備国際大学社会福祉学部紀要 10, 91-104.
- (2006) 英語所有構文に見られる英語全体に浸透している言語傾向との接点に関する考察 吉備国際大学社会福祉学部研究紀要11, 129-141.
- (2007) 英語所有構文の例外に関する考察 (1) 吉備国際大学社会福祉学部研究紀要12, 145-156.
- (2008) 英語所有構文の例外に関する考察 (2) 吉備国際大学社会福祉学部研究紀要13, 175-183.
- (2009) 言語と生物の類似点に関する一考察 吉備国際大学社会福祉学部研究紀要19, 113-121.
- (2010) 言語と生物の類似点に関する一考察 2 吉備国際大学社会福祉学部研究紀要20, 99-107.
- (2011) 言語と生物の類似点に関する一考察 3 吉備国際大学社会福祉学部研究紀要21, 101-108.
- (2012) 言語と生物の類似点に関する一考察 4 吉備国際大学研究紀要 人文・社会科学系22, 95-103.
- (2013) 言語と生物の類似性に関する一考察 吉備国際大学研究紀要 人文・社会科学系23, 95-104.
- (2014) 言語と生物の類似点に関する一考察 6 吉備国際大学研究紀要 人文・社会科学系24.23-31.
- (2015) 言語と生物に関する一考察—特に効率性に関して— 吉備国際大学研究紀要 人文・社会科学系 25.27-34.
- (2016) 日時の表現に関する再考察 2 吉備国際大学研究紀要 人文・社会科学系26, 91-99.
- (2016b) 言語と生物の類似点に関する一考察 国際教育研究所紀要 第22・第23号合併号, 109-118.
- (2017) 言語, 文化, 生物に関する共通性の一考察 吉備国際大学研究紀要 人文・社会科学系27, 65-72.
- (2018) 言語と生物の類似点 補足 吉備国際大学研究紀要 人文・社会科学系28, 69-76.
- (2019) 言語と植物における類似点の一考察 吉備国際大学研究紀要 人文・社会科学系29, 47-53.
- (2019b) 『英語の所有構文に関する一考察』 ふうろう出版.
- 池上嘉彦 (1978) 『意味の世界』NHKブックス.
- (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.
- (1991) 『英文法を考える』筑摩書房.
- 稲垣栄洋 (2015) 『たたかう植物』ちくま新書.
- 今井邦彦編 (1985) 『英語変形文法』大修館書店.

- 近藤滋, 笹井芳樹他 (2011) 『細胞「私」をつくる60兆個の力』NHK出版.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*, Chicago Press.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago : The University of Chicago Press. (池上嘉彦, 河上誓作 他 (訳) 『認知意味論』紀伊國屋書店 1993)
- Langacker, Ronald (1993) "Reference-Point Constructions", *Cognitive Linguistics* 4-1, 1-38.
- Leech, Geoffrey N. (1971) *Meaning and the English Verb*. Longman.
- Lyons, John. (1977) *Semantics 2*. Cambridge University Press.
- 毛利可信 (1983) 『橋渡し英文法』大修館書店.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*, Longman, London.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- リチャード・ドーキンス (2009) 『進化の存在証明』早川書房.
- 清ルミ (2007) 『優しい日本語』太陽出版.
- Swan, Michael (1980) *Practical English Usage*, Oxford University Press, Oxford.
- 立花隆 (2004) 『脳とビッグバン』朝日文庫.
- 田中春美他 (1982) 『言語学演習』大修館書店.
- スタンリー・コーヘン (2002) 『犬語の話し方』文春文庫.
- ステファノ・マンクーゾ, アレッサンドラ・ヴィオラ (2015) 『植物は知性を持っている』NHK出版.
- Taylor, John R. (1989b) "Possessive Genitives in English", *Linguistics* 27, 663-686.
- (1994) "Subjective and Objective Readings of Possessor Nominals", *Cognitive Linguistics* 5-3, 201-242.
- (1996) *Possessive in English*, Oxford University Press, Oxford.